



TITLE:

巻頭言 : 持続型キャンパスへの展望

AUTHOR(S):

酒井, 伸一

CITATION:

酒井, 伸一. 巻頭言 : 持続型キャンパスへの展望. 環境保全 2016, 30: 1-1

ISSUE DATE:

2016-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209832>

RIGHT:

持続型キャンパスへの展望

京都大学環境科学センター
センター長 酒井 伸一



2015 年末より、当センターの浅利美鈴先生を中心に「京都大学の環境・サステイナビリティに関する 100 人会議」が推進されています。持続可能性（サステイナビリティ）をどう考え、京都大学でどう具体化させるかを中心に考えるプラットフォームという位置づけです。2015 年末の気候変動対応を求めるパリ協定が定められた今、こうした考え方をどう具体的に展開していくかが問われているとの問題意識で議論が進められていると認識しています。そこでは、念頭におく時間軸として、短期：2050 年、中期：2100 年、長期：3000 年というイメージが提示され、短期の実務的目標とその目標達成に向けた素材立案と実行推進をしっかりと進めることが語られつつあります。一方、中長期展望は具体性よりは柔軟な基本原則論の議論を続けることがより重要と考えられ、できれば短期と中長期が連続的に繋がっていくことができれば望ましいといえます。

実務的目標にはさまざまな対象がありますが、なかでもキャンパスの温室効果ガス削減は、社会的な責務の側面からも、大学経営的な側面からも極めて重要な目標になることでしょう。京大は、エネルギー消費や温室効果ガス排出量の単位面積当たり原単位を毎年 2%削減という目標を 2000 年代後半に建てています。小さな目標に見えますが、上記のような中長期の時間軸を念頭におけば限りなくゼロをめざすことになります。加えて、日本政府はパリ協定審議に向けて、国際社会に対して 2013 年の総排出量比で、2030 年に 26%減を宣言しています。京大の温室効果ガス削減目標は、この両者を目標とすることは、短期的には極めて合理性の高い目標といえます。この時点で、目標策定に時間や知恵を講じるよりは、削減の素材や基本原則の検討に時間や知恵を投じることが、より求められるとも言えるでしょう。

基本原則の検討は文明論的展望に繋がる側面があり、第一義的には実務目標にある温室効果ガス対策と現代の文明論的相克に対応可能な基本原則を打ち立てることはできるかという課題に通じます。京大の歴史には、梅原猛先生の「森の思想」や尾池和夫先生の「天地人—三才の世界」など、こうした問いに答えてきた歴史があります。相当に柔軟に論争的議論のプラットフォームを用意し、トライ＆エラーを許容、レビューメカニズムを効かせながら、その時々により一定の合意に辿り着いていくことが望まれます。実務的目標と文明論的展望を語り、理念と現実を創り上げていく場になることを願っています。